

目黒稲門会会報



(題字：眞仁田 勉 初代会長)

第87号 2020年6月

発行人：後藤 克彦 編集長：猪名川 一雄 事務局長：吉野 博明
事務局：〒153-0053 目黒区五本木2-22-6 Tel 03-3713-1684

第21回定期総会・懇親会について 総会は書面決議に変更、懇親会は中止

第21回定期総会・懇親会については、既に役員会議事録及びHP上で下記要領にて開催することとしておりました。

日時：2020年7月18日(土)
16時～19時
会場：渋谷区渋谷4-4-25
アイビーホール ナルドの間

しかし乍ら、新型コロナウイルスの感染が進むにつれて、状況が変化してまいりました。

早稲田大学総長・校友会代表幹事連名で、「新型コロナウイルスの影響拡大に伴う各支部・稲門会への要請について」が発出され、9月19日までの活動自粛が要請されました。

その為、5月の役員会での決議(書面)を得て、定期総会は7月中旬に書面決議に変更して実施、懇親会は中止になりました。

目黒稲門会の新型コロナウイルスの影響への対応について

目黒稲門会では、2月中旬以降感染拡大の勢いが増してきた状況に鑑み、2月24日開催予定の「よん月会」の休止を同19日に発表することに始まり、早めの対応を心掛けて参りました。

さて2月25日に早稲田大学総長・校友会代表幹事連名で、「新型コロナウイルスの影響拡大に伴う各支部・稲門会への要請について」が発出され、3月末までの活動自粛が要請されました。

これを受けて、目黒稲門会会長は2月26日付で3月末までの活動自粛を告示しました。

更に、3月18日付大学・校友会連名で4月末までの自粛要請延長、3月24日付大学告示で5月10日までの活動自粛要請再延長、4月3日付大学・校友会連名で9月19日までの自粛要請期間延長が告示さ

れてきました。

現在は、目黒稲門会の活動すべてについて、早稲田大学の秋の卒業式が行われる前日の9月19日まで全面的に自粛しております。

役員会や会報編集委員会は基本的には書面(メール)により行っております。事務局内の書類の受渡しも、メールで行えない場合は、自宅近くの路上で引き渡すなど、接触を極力抑制した形となっております。

目黒稲門会の会員構成は、高齢層が多いため感染しやすく、また重篤化リスクがあります。さらにはその活動の一つ一つがクラスター化の危険もはらんでおります。従いまして、会員各位には上記趣旨を十分にご理解頂いた上で、引き続き宜しくご協力を賜りますようお願い申し上げます。

自粛下での目黒稲門会の活動について

各部会が夫々集まって行う活動は全面的に自粛せざるを得ませんが、三役・事務局としては何とか会員同士の交流の機会を維持して参りたいと存じます。

その中でも、会員をつなぐ年4回発行の会報を、何としても続けて参りたいと存じます。

更にウェブ上で会員の交流を図ることが必要ではないかと、その方策を模索してきました。

こうした試みの最初は、グループメールであるMLのアドレスを新たに設けて、そこに登録いただいた会員同士が自由にメールを共有する仕組みです。登録された会員が、日常の生活の一コマを掲載すると、他の登録会員皆が共有できますので、お互いのやり取りの中から、少しでも失われた交流の機会を補えるものと期待しております。メールアドレスはme9610monall@mlist.ne.jpです。

まだ登録されていない方は、事務局宛てお申し出ください。

次に、試験的に始めているウェブ会議システムを利用した活動があります。

既に実験的に ZOOM と言う会議システムを利用して懇親会(PC/タブレット/スマホを利用して自宅や旅先に居ながら会員同士の飲み会)を開催しました。自宅などで、一人寂しくあてを口に運びお酒を飲むのではなく、画面の向こうの会員たちとワイワイガヤガヤ弾むと、なかなか盛り上がるようで評判が良いようです。

このシステムは、本来会議用のものですので、現在集まることが叶わない役員会他の諸会議に加え、部会によっては応用できないものかと、関係者たちで議論を進めております。

ご興味のある方は、事務局までお知らせください。こちらで登録されたメンバーには、逐次企画があるたびにご連絡します。会議の管理者から送られてくる URL をその集まりの日時にクリックすると、簡単に参加できます。

このほかにも会員同士の絆を深める上での良いごアイデアがありましたら、事務局宛ご遠慮なくご提案ください。宜しくご協力をお願い申し上げます。最後になりますが、免疫力アップの体力づくりは家での体操や人けのない裏道でのマスクをつけての散歩で元気にお過ごし下さい。(吉野 記)

各部会からの案内・報告

ウォーキング部会

ウォーキングの後の美酒を目標に、無理なく楽しい例会を実施しております。健康増進と体に優しい例会に是非ご参加ください。

<実施報告>

2月例会 武士の町佐倉を巡る
2月18日(火) 参加12名
ウォーキング部会長 吉野博明

<2月例会に参加して>

佐倉藩11万石、京成佐倉駅と JR 佐倉駅に挟まれた東西に約5km、南北に約3kmの台地の上にまとまって史蹟がある。

今日は冷たい風が少し吹いているが晴れて上々の天気。駅前からバスで宮小路町下車、佐倉城址公園の方に行かずに反対南側ゆるい坂道を登り武家屋敷通りへ。東側から西へ河原家中級武士と但馬家上級武士、武居家下級武士の家が3棟並んで公開されている。東側から千葉県、佐倉市、国の登録文化財となっている。江戸時代の建物。藩が材料、規模とも質素に作り、武士に貸与したもので、藩士の身分によって住む人が入れ替わる。河原家の建物はこの中で一番古い。但馬家の建物は現在の場所に始めからあり後の2棟は別の場所から移した。家の中には古い調度も置かれて中を見学出来る。

屋敷通りを直進するとサムライの小径「ひよどり坂」に突き当たり、上から下を見通せる。坂道の両側は竹林で昔と変わらない景観。2人位しか歩けない小径を下りずに集合写真を撮る。

屋敷通りを戻り武家屋敷の間の暗闇坂を北へ下りその先に佐倉の総鎮守麻賀多神社に突き当たる。延喜式に載る古社、毎年10月佐倉の秋祭りとして賑わう。

国道を横切り塚本美術館へ。最近、女性に人気の刀剣類専門館。門を入ると右側展示棟正面は高床式の収蔵庫で両方鉄筋。実業家のコレクションで刀剣400点等を収蔵。その中から毎回20点程を交代で展示している。観覧料は無料。「新春館名品展」として古刀から新刀まで良く手入れした10振と小物を展示。長船光忠や正宗の父行光などマニア垂涎の刀がキラリと光っていた。

メイン通りを見物しながら歩く。気になることがあった。案内地図にはお寺が多いのだが法事を行う料理店やレストランが少ないのが気にかかる。

今日最後の旧堀田邸へ。建物は国指定重要文化財。庭園は国指定名勝。門を通り玄関へ。中をのぞき入らずに横道を通って庭園に出る。西日を受けながら建物をバックに集合写真を撮る。広大な庭は、きれいに剪定された樹木それに景石や灯籠が配置され気持が晴々する。

庭を横断し佐倉の台地を下り JR 佐倉へ午後4時ごろ到着。総武本線、横須賀線を乗り継いで品川駅で降り、駅前で打ち上げ。「佐倉」へ乾杯。

(林田雅敏 記)



囲碁部会

2月20日(木)に下目黒住区センターにおいて2月定例囲碁部会が午後1時～5時で開催された。参加者は9名でした。令和元年秋季リーグ戦は令和2年3月で終了し、大久保健治六段の三連覇の偉業でした。

囲碁部会長 保井 正

麻雀部会

2月17日(月) 武蔵小山 サン 開催の定例大会はこの数年の最小の8名、二組の大会でした。

麻雀部会長は鶴野より村上 柗氏になりましたのでご報告いたします。

麻雀部会長 鶴野洋治

俳句部会

目黒稲門会設立20周年記念作品展出句

(順不同)

中原道夫	光明の洩れくる薔の穴刻む
川井素山	遠山を染める夕日や寒天干す
保井寶正	梵鐘に風花舞ふや比叡山
佐久間喬	令和の子一人加ふる祝箸
後藤克彦	鮫鱈や不気味な顔に手鉤穴
永井正孝	賀状一片故郷の友は元気なり
青木英林	霜柱蹴散らす時は子に戻る
吉田啓悟	江戸風鈴かなたより風かげりくる
丸山酔宵子	凍星やトランペットにひとしづく
渡辺鯨波	春の塵手塚治虫のベレー帽
山本草風	新走一気に臍腑駆け抜ける
佐久間たか子	邪気さりし星あおおと追儼かな
原 晶如	柔らかに結ぶ手のひら雪婆
金森純女	窓辺には手のひらほどの鏡餅
青葉ひかる	初春のピアノの音色心澄む

俳句部会長 佐久間 喬

カラオケ部会

2月14日(金)に実施されたカラオケ部会への参加者は僅か三人。コロナウイルスの蔓延が一日も早く収束し、部会の再開が早くなる事を願うばかり。

カラオケ部会長 奥村忠男

新任幹事紹介



川崎真樹子

1975年法学部を卒業し、1986年から弁護士をしております。目黒稲門会とのご縁は、2005年頃に入会させていただいたのが始まりです。

今般、幹事に就任させて頂きました。宜しくお願い申し上げます。

目黒わが町自慢

東山 加瀬裕子(人科学術院教授)

中目黒駅から池尻大橋方面に向かって歩き、3番目の信号(小川坂入り口)に到着すると、東山1丁目が始まる。小川坂を烏森小学校に向かって登り、宿山交番前からオリンピック道路(野沢通り)を渡ると、東山2丁目になる。東山2丁目は、元練兵場の跡地に建った、広大な公務員住宅団地である。東山中学周辺であると思えばよいが、自衛隊中央病院まで行くとそこはもう世田谷区である。2丁目に続く東山3丁目は、公務員住宅から環状6号線に向かって坂を下りた、池尻大橋駅の南側にあたる地域である。

つまり、東山地域は庶民の住宅地であり、環状6号線にかかる東山1丁目の表示以降、中目黒駅周辺の賑わいは一段落する。目黒川の桜見物の頃に、中目黒周辺は観光地のような趣を呈するが、それも環状線の反対側、青葉台地区が中心である。スターバックスロースターで珈琲を飲み、福砂屋でカステラを買った観光客の多くは、そのまま中目黒駅に戻るか、代官山蔦屋の方に行ってしまうので、東山地域側にはあまり来ない。

池尻大橋駅からも目黒川の桜に沿って歩くことが出来るが、露店もなく、家族連れがゆっくり散策している。近くには東山貝塚公園があり、竪穴式住居が復元されている。4千年から5千年前の縄文時代に東山に人が住んでいたそうで、東京三大貝塚の1つとして史跡指定されている。竪穴式住居の傍には、崖下から湧く水でせせらぎが作られており、趣があるのだが、最近、我が家の5代目が落ちた。着替えを持っていない場合、せせらぎには要注意である。

ここまで来たら、首都高速道路の大橋ジャンクションの上に建設された天空公園に登り、「自然」を満喫して欲しい。歩道に段差がないので、ベビーカーや歩行器で来る公園としては最適である。住民がボランティアで世話している四季折々の庭園が美しい。秋にはブドウが本格的な実りを迎える。



天空公園

会員の広場

我が家は戦国大名の末裔！？



大内秀明（昭和33年 文）

歴史の上で、<戦国時代>のプロローグとされている「応仁の乱」とは室町時代の末期、応仁元年から文明九年に至るまで

11年間続いた、京都を中心とする内乱で、将軍家の相続問題に端を発し、畠山・斯年波両管領家の家督争いから、諸国の守護大名が細川勝元率いる東軍と山名宗全率いる西軍に分かれて争った、群雄割拠の幕開けとされる戦いである。

そこで、この争いが従来になく長期化した起因となったのが、西軍に肩入れした、大内家24代の政広の参戦とされている。すなわち、この争いは当初、東軍（細川方）の優勢の裡に決着するとみられていたが、政広が周防、長門、豊前、筑前、筑後、安芸、石見、伊予の8か国の軍勢数万を擁して参戦して以降、西軍が勢いを盛り返し、長期の争いに突入することになったことから、それまで地方の一守護大名であった大内氏が一躍クローズアップされる契機となったと言えよう。

そもそも、大内家の起点については、手元の家系図と諸文献（別掲）の記述には多少の差異は見受けられるものの大差はない。それら諸資料に基づけば、推古帝の時代（西暦6世紀末から7世紀初頭）、百済の流れを汲む琳聖王子（一部、その縁者との説あり）が、周防の国佐渡郡多々良浜に漂着、当初は多々良姓を名乗って帰化、後、上洛して大内の賜姓を得、以降、初代長門守正恒を始祖として防長を起点に勢力圏を拡大しながら26代義隆に至ったとされている。無論、その数百年の間には幾多の浮沈の歴史があったようで、周辺の諸豪とは幾度かの小競り合いを経たとの記録も残されているが、少なくとも「応仁の乱」の時点では、周防・長門をはじめ8か国の大軍を従えていたことは明記されており、その当時、軍事力はもとより長期の遠征に耐えうる資金力をも併せ持っていたと推測される。

そこで26代義隆（永正4年～天文20年 1507～51年）に行きつくことになるが、その在世中は戦乱を逃れた公家達を山口の城下に保護したり、明や朝鮮との交易を行って「一切経」などの文物を輸入したとされている。また、1550年と51年には再度F・ザビエルを引見し、山口でのキリスト教布教を許すなど文化の普及・発展にも貢献した実績も伝えられている。

しかしながら、天文20年9月、藩政に異を唱えた遠戚の家臣、陶晴賢の叛にあい、同年9月1日、長門国深川の大寧寺において自刃。その子新介も殺されて、一族離散し、名を秘して各地に落ちのびたとの記述が残されている。ここに長年にわたり中国地方に絶大な勢力圏を誇った大内家は正史の上から名を消すことになったのである。ちなみに、その長期政権の遺跡としては嘉吉2年（1442年）建立の国宝「瑠璃光寺五重塔」が残されていることを付記しておきたい。

その後、陶晴賢は逆臣の名を避けたのか、対岸の肥前大友家より同家の遠縁を招き、大内義長を名乗らせたが、毛利元就はこれを容認せず、年号が弘治と改まった同年10月、厳島で陶晴賢に大勝、さらに3年後、義長を滅ぼし、周防、長門など西中国を中心とした大々名に登りつめることになった。

以上の経緯は諸文献にも明らかな事跡として記載されているが、当家の資料に基づけば、残された一族の一部は北九州に落ちのび、名を秘し、最後まで諫言を続けてくれた旧重臣の姓から弘中姓を名乗ることになったとされている（義隆の遺言によるとの説もある）。

以降の記録はあくまで当家に現存する家系図からとなるが、それには16世紀半ばから17世紀末の約1世紀半が欠落しており、これは後述のように居を富山に移して以後、2度にわたって見舞われた大火に起因すると考えられている。

そして、ここで現存の系図に基づく始祖、弘中養榮重勝の登場となるが、初代とされる重勝は元々黒田藩松平筑前守家中の次男であったが、養子縁組後、長崎へ赴き、蘭方（西洋医学）を学び、それにより、当時の松前藩藩主の難病を治癒させたことが明記されており、それが転機となったものか、加賀百万石前田家の支藩である越中前田侯に元禄8年に召し出され、禄高二百石及び薬種料、金十両という処遇で藩医となったと伝えられている。

以後、復姓して代々「大内」を名乗るようになり、医を家業として富山に在住するようになった。しかしながら、系図によれば、その後は養子また養子という時代が多く、血統的には（祖父秀磨によると）断絶という指摘も見受けられる。

ともあれ、始祖重勝を初代とした系図は現存しており、それによれば小生は10代目という位置づけとなって今日に至っているという次第である。

——参考文献——

姓氏家系大辞典 昭和38年11月 角川書店

コンサイス日本人名事典 平成21年1月 三省堂

戦国武家事典 平成4年9月 新人物往来社

学院の思い出



小杉 哲(昭和41年 理工)

小生は昭和37年(1962年)学院卒です。学院とは早稲田大学高等学院の略称だが、早稲田関係者はほとんどこの略称を使う。

小生は神奈川県鎌倉市で生まれ、鎌倉市立御成中学校に通っていた。当時鎌倉から学院に通っていたのは小生だけであった。というのも、鎌倉駅から学院がある上石神井駅までは当時2時間(当時は西武新宿線に急行がなかった)掛ったからである。徒歩の時間等を加えると片道約2時間半となる。ちなみに日吉の慶応には同学年で10人ほど通っていた。実は学院合格前に神奈川県立湘南高校への推薦入学が決まっていた。入学を辞退すると翌年の推薦枠に影響するので、湘南高校の校長に学校として仁義を切ったほうがよいと担任から言われた。校長と一緒に初めて藤沢の湘南高校まで行き、いろいろ理由をつけて入学辞退を謝罪した。学院を選択した理由の一つは、5歳上の次兄が学院から建築学科に通っており、受験勉強のないことに魅力を感じていたこと。父と長兄は慶応だが、わざわざ遠方の学院にしたのは、小学生のころからラジオ等に興味があり、理工系なら慶応より早稲田だと思っていたからである。

学院は設立から長らく現在の戸山キャンパスにあったが、小生が入学した3年前の1956年に上石神井に移転した。入学当時学校の周りには田んぼや畑も多く、田んぼの沿いの小川には蛙や小魚もいっぱいいた。本館と称する3階建てのコンクリート校舎はあったが、1年生は2階建ての木造で、なぜか廊下がアスファルトのようにベタベタし黒光りしており、休み時間になると廊下でサッカーの真似事をしていた。大隈重信翁が「男は掃除などせず勉強しろ」と言ったとかで、中学校までやらされていた教室の掃除から解放されたのは嬉しかった。

始業は朝8時40分で、毎日鎌倉駅6時13分発の横須賀線に乗った。ホームの同じ場所から乗るのでいつも同じ顔触れであった。品川駅で山手線に乗換えるのだが、鎌倉から渋谷まで一緒の女子高生がいて気にはなったが最後まで声を掛けられなかった。

旧制以来の伝統で第二外国語が必修であり、ドイツ語・フランス語・ロシア語のいずれかを1年生から履修した。ドイツ語選択者が圧倒的に多く小生も選んだ。仕事でドイツとフランスに滞在した時には、フランス語を選んでおけばよかったと思った。ドイ

ツでは英語でこと足りるがフランスではフランス語の必要性を強く感じた。試験は期末と学年末にあり、50点未満を赤点と呼び、赤点6個以上で原級(落第のこと)となる。毎年各学年500人中10~20人程度が原級となっていた。3年生になるとき文科系(6クラス)と理科系(4クラス)に分けられた。3年生では通常の試験とは別に特考(特別考査)と呼ばれる5科目各科目10点満点の試験があり、合計点の上位者から順に志望学部が決められた。学院にはいわゆる休講に代わり「代講」というシステムがあった。教師の都合がつかない場合に代わりの教師が教室に来るが、出席だけ取って退出するので実質的に休講となる。違う教師が来ると歓声が上がった。

学院は当時唯一の付属高校で、校歌も大学と同じ。東京六大学野球早慶戦の日は休みであった。休みといっても、朝登校してから神宮球場へ応援に行くという建前であった。(応援に行かなくてもよい)2年生の秋にあの早慶6連戦があった。慶応が勝ち点をあげれば優勝となる状態で、初戦は負けたが何とか連勝して優勝決定に持ち込んだ。決勝戦はくる日も来る日も引き分けで、3試合目に勝って早稲田の優勝となった。この時は雨天中止がなかったが、中止の場合は通常授業となるので早慶戦の日は天気に一喜一憂していた。

学校行事は他の高校と同様、体育祭、文化祭や修学旅行等もあったが、特に思い出すのが10キロマラソンだ。特別の事情がない限り全校生徒が年1回強制的に学校の近辺約10kmを走るというだけのものだが、なぜか強く記憶に残っている。タイムは関係なく、途中で歩くものも多かった。中には体調不良を理由に逃げ回る者もいた。クラブ活動は放送研究部に属していた。放送研究とは名ばかりで、アン



プや無線機等を作っているのが主な活動であった。顧問は理科の先生、3年生は5名で、文化

祭では小生の無線機を本館3階の窓際に持ち込んでアマチュア無線の実演を行った。修学旅行は3年生の時だけで、九州一周旅行であった。以前は北海道旅行であったが、1954年の洞爺丸事故を教訓にその後は陸続きで行ける九州一周旅行となったとのこと。鈍行の夜行列車で座席に板をひいて寝たのが懐かしい。学院は付属校のため受験勉強が不要で授業もバラエティに富み、大学までずっと一緒の友人も多くでき、自由に楽しい3年間であった。

目黒稲門会設立20周年記念会員作品展

日時：2020年2月4日～2月9日 目黒区美術館区民ギャラリー



心のふるさと
水彩 6F
大杉邦雄



海辺水彩の朝
水彩 10F
岩佐好恭

たまごからうまれたよ
水彩
堀合摩利*



花器と麦
デッサン
佐久間たか子*



椅子に掛ける少女
パステル 6F
大杉邦雄

コスタ デル ソル
油彩 10F
大杉邦雄

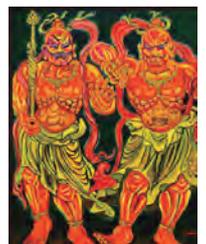


雷門
油彩 10F
大杉邦雄



庭の情景
油彩
加藤玲子*

東大寺金剛力士立像
油彩 100F
佐伯文子



しまなみ海道
油彩 50F
佐伯文子

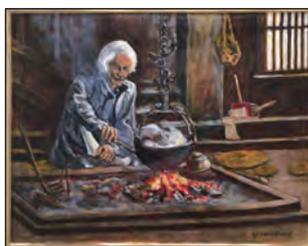


Space Baby II
油彩 10M
澁谷瑠璃

逃避行
油彩
澁谷瑠璃



Hexagon Work R
油彩 10F
杉浦良允



炉火明かり
油彩 100F
服部尚彦

石壁のレストラン
油彩 10F
服部尚彦



初夏の庭
油彩 10F
丸山忠生



晩秋
水墨画 6F
佐久間たか子*

塩原、竜化の滝
水墨画 6F
牧野武夫



※ HP(<http://me96tomon-waseda.la.coccan.jp/MenmberArtGallery.html>)で全作品を大きな画像でご覧頂けます。

※ *印の作者は会員ご家族です。



裏磐梯
水墨画 6F
牧野武夫



雅風書
書
故大野幸子*



月書
笠谷興一朗



庚子の歳
俳画
保井栄子*



皿
陶磁器
加藤玲子*



幸福を呼ぶ赤い鳥
(皿)
陶磁器
後藤克彦



鶏大将
(ニンニク入れ)
陶磁器
後藤克彦



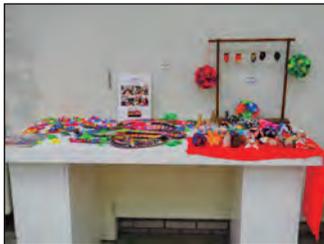
幼い日の夢
タイルモザイク
市瀬一江



シンゴジラのジオラ
マジオラマ
堀合義統*



吊しびな
手工芸
井村恵里子*



折り紙
手工芸
井村恵里子*
有志10名



マーレン家具
手工芸
吉野美智子*



2000年第1回
総長杯ゴルフ大会
優勝杯
浅海敏之



俳句部会
光明の洩れくる菴の
穴刻む
中原道夫(道夫)



俳句部会
遠山を染める夕日や
寒天干す
川井信義(素山)



俳句部会
鮫鱈や不気味な顔に
手鉤穴
後藤克彦(克彦)



俳句部会
令和の子一人加ふる
祝箸
佐久間 喬(喬)



俳句部会
凍星やトランペットに
ひとしづく
丸山忠生(酔宵子)



俳句部会
梵鐘に風花舞ふや
比叡山
保井 正(寶正)



旅行部会
津軽富士見湖・
鶴の舞橋
写真
狩野俊夫



旅行部会
太宰治記念館・
斜陽館
写真
佐伯友子*



旅行部会
雲祥寺・樹齢
500年老松
写真
市川 亘



旅行部会
津軽鉄道・ストップ列車
写真
吉田博行



旅行部会
ホテル星野リゾート・青森屋
写真
金井豊男
20周年記念
旅行部会
2020年冬の青森の旅
記念写真



旅行部会
八甲田
ロープウェイ山頂
写真
服部真彦*



旅行部会
酸ヶ湯(すかゆ)温泉
写真
小杉 哲
旅行部会
酸ヶ湯温泉・
本館裏庭雪景色
写真
服部尚彦



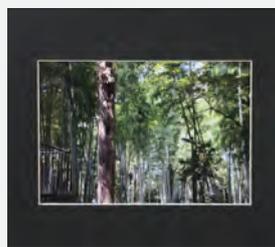
ウォーキング部会
武蔵野
三十三観音巡り
パネル



20周年記念
ウォーキング部会
長瀬、宝登山を巡る
記念写真



日本平ホテルより
富士山を望む
写真
大竹一子

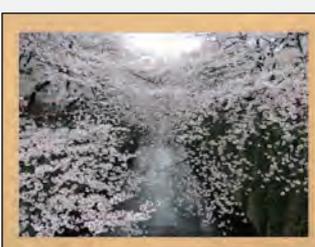


すずめのお宿
写真
大野利幸

逆さ東京スカイツリー
(冬の向島百花園)
写真
金井豊男



大鹿村の紅葉
写真
山内 宏



目黒川の桜風景
写真
山内 宏



デッキイゾー
真夏の収穫
写真
吉田博行